

個人としてのアイデンティティ

2021年3月4日 筒井哲郎

1. 誰も信じない「中長期ロードマップ」

3月11日が近づいてきた。今年は福島原発事故から満10周になるので、数々のイベントが計画されている。マスコミもこの災害に係る話題をこの前後の数週間に発信している。私も友人とともに、去る1月に、事故現場の後始末に関する記事を『世界』2月号と『環境と公害』Vol.50 No.3(1月刊)に寄稿した。

主張は「デブリの長期遮蔽管理論」と名付けたが、事故の後始末を30~40年で終わらせるとしている政府・東電の公式工程表「中長期ロードマップ」を破棄し、まったく新しい工程表を作り直すべきだというものである。すなわち、政府・東電が今年から着手予定のデブリ取出しを当面行わず、100年以上現位置で保管するべきだ、というものである。私たちがここ1-2年のうちにデブリ取出しを行うべきでないとする理由は、非常に高い放射能汚染のリスクがあること、デブリは鋼材やコンクリートと固く溶融しているので遠隔ロボットで全体を取り出すことがほとんどできないこと、たとえデブリを取り出したとしても県外へ持ち出して恒久処分する場所がなく、サイト内に仮設保管施設を作って放射能飛散リスクと盗難リスクが高い状態で少なくとも50年間は保管しなければならないことなどである。仮に将来県外処分が可能になったとしても、その時までは現状の格納容器内に置いて放射能の減衰を待った方がはるかに作業条件が良くなるわけで、今慌てて取り出すことに何ら優位性はない。

マスコミの記者さんたちからの取材申し込みがあり、ZOOMで過去数週間に、週刊誌2社、日刊紙1社、海外の新聞社のインタビュー取材を受けた。海外の特派員とは、上の説明に続いて、次のようなやり取りをした。

記者「政府や東電といった当事者が、ここ1-2年の間にデブリ取り出しを開始すると言っているのは、それなりの見通しがあつてのことではないのですか？」

私「中長期ロードマップは、着手時期を21年と記載しています。着手は問題なくできます。なぜなら、事故時にメルトダウンした核燃料や鋼材やコンクリートの1部が飛沫として飛散し、コンクリート表面上に小石のように転がっています。それを小ぶりのロボットアームで取り出すことは簡単で、すぐにでもできます。けれども、一つの格納容器内の中には300トン前後のデブリがあり、その大部分は鋼材やコンクリートと溶融しあつて構造物やコンクリート床と一体になっています。それを取り出すには削岩機のような強力な機械で塊を砕かなければなりません。しかも最後の1グラムまできちんと測定して国際原子力機関に報告しなければなりません。着手は容易ですが、いつ終わるかはわかりません。ロボットもこれから開発しなければならないし、当面着手年度には1.37兆円の予算を準備する必要がありますが、作業全体の費用は『想定困難』としています。つまり、最終段階までの期間も費用もわからないとしています」

記者「政府は地元福島県の知事や町の首長さんたちにスケジュールを約束したので、いまさら変更できないのではないですか」

私「顔を立てるという意味ではその通りです。しかし、2011年に、10年後からデブリ取り出しを開始し、その作業を10年間で済ませるというロードマップを発表したときには、その取出し方法も確立していなかったし、核燃料がどういう状態で分散しているかもわかっていませんでした。そのために『判断ポイント』という再考し、予定変更する機会を記載していました。彼らは過去5回にわたって、このロードマップを改訂してきましたが、

根本的な修正を要する要素を見いだしながら、その改訂に伴う政治的な重荷から逃避して、目先の期限がきてしまい、マイナーな仕事の時期を微修正するだけに留めてきました」

記者「しかし、デブリ取出し着手の時期に来てしまって、あなたが言われるように作業完了の見通しもなく、期間も費用も把握できないという仕事を推進しているというのは、当事者としても困ることではないでしょうか。なぜ担当の公務員はそれを解決しようとしないのでしょか？」

私「日本の官僚機構の中では、担当の管理職が自分個人の人格を賭けて責任を負わなければならないという事態は発生しません。上級職公務員はほぼ2年ごとに部署が変わるので、特定の仕事の計画が不合理でも、自分が最後までそれに取り組んで決着をつけるという強い動機は働かず、目先の着手ということだけを見届ければ、自分の仕事を果たしたという名目は立つようです。そういう仕事ぶりを順繰りに回しているの、いったん決めた政策が不合理だと分かっても、官僚たちが自ら汗をかいてそれを直すことは起こりません。原発推進政策もそうですし、再処理工場の建設もそうです」

記者「…………？」

私「オリンピックの計画を見てください。日本の政府はいったん決めると、必ず実行するといって譲りません。あたかも自分がウィルスをコントロールできるように決意表明しています。日本の政府官僚は神様なのです」

記者「アハハハ」

2. アイデンティティの抹殺

吉田満『戦中派の死生観』という本を読んだ。著者は、1943年大学3年生の時に学徒出陣で応召し、2等兵生活を経て海軍士官(少尉)になり、44年4月戦艦大和の「特攻出撃」に乗り組んで出撃、撃沈後波間から救い上げられた約1割の乗組員の一人となった人である。戦後日銀に勤め、50代で病を得て召天。復員直後に端正な筆致で名著『戦艦大和ノ最後』を書いた。それ以来、戦後の体制変換を経た後の高度経済成長の時代に生きる自分と戦争に従事した昔の自分との、人間存在としての一貫性を問い続けた人である。戦争体験の著述を出発点とし、戦後長いサラリーマン生活をしながら、この世に生きる思想を問い続けてきた軌跡が上記の『死生観』という本に納められている。そのさわりを紹介する。

ポツダム宣言受諾によって長い戦争がおわり、廃墟と困窮のなかで戦後生活の第一歩を踏み出そうとしたとき、復員兵士も銃後の庶民も、男も女も老いも若きも、戦争にかかわる一切のもの、自分自身を戦争協力にかりたてた根源にある一切のものを、抹殺したいと願った。(中略)

しかし、戦争にかかわる一切のものを抹殺しようと焦るあまり、終戦の日を境に、抹殺されてはならないものまで、断ち切られることになったことも、事実である。断ち切られたのは、戦前から戦中、さらに戦後へと持続する、自分という人間の主体性、日本および日本人が、一貫して負うべき責任への自覚であった。要するに、日本人としてのアイデンティティそのものが、抹殺されたのである。

戦中の時代は、ある意味では、アイデンティティ過剰な時代であった。日本人および日本の国家という、アイデンティティの枠だけが強調され、その内容といえば、空虚きわまるものであった。戦争下に横行した精神

¹ 文芸春秋社、1980年

² 講談社文芸文庫、1994年

主義「一億玉砕」に象徴される狂信的愛国心の底には、この実体のない、形骸だけのアイデンティティがあった。

日本人、あるいは日本という国の形骸を神聖視することを強要された、息苦しい生活への反動から、八月十五日以降はそういう一切のものに拘束されない、「私」の自由な追求が、なにものにも優先する目標となった。日本人としてのアイデンティティの中身を吟味し直して、とるものはとり、捨てるものは捨てて、その実態を一新させる好機であったのに、性急な国民性から、それだけの余裕はなく、アイデンティティのあること自体が悪の根源であると、結論を飛躍させた。「私」の生活を豊かにし、その幸福の増進するためには、アイデンティティは無用であるのみならず、障害でさえあるという錯覚から、およそ「公的なもの」のすべて、公的なものへの奉仕、協力、献身は、平和な民主的な生活とは相容れない罪業として、しりぞけられた。(中略)

しかしこうした事情は、昭和三十年代の高度経済成長期ののぼりつめる頃から、変化の兆しをみせはじめた。日本の存在が、自由諸国のなかで無視できぬウエイトを占めるにつれて、外からの力は、当然のことながら、アイデンティティの枠のなかで、日本を捉える方向に急速に変化した。

肝心の日本人だけは、相変わらずアイデンティティを無視し、国籍の束縛から解き放たれたまま海外に進出し漂流することが、許されると楽観していた。ここに生まれたギャップが、数年来日本を襲っている危機的状況の真の背景であり、日本が再び世界の孤児となる恐れをもたらした根因であることは、言うまでもない。(中略)

自分は日本人であるという基盤を無視し、架空の「無国籍市民」という前提に立って、どれほど立派な、筋の通った発言をくり返そうとも、それは地に足のついた、説得力のある主張とはならないであろう。平和、自由、民主主義、正義、そのどれを叫んでも、ことばが言葉として空転するだけで、発言は心情的に流れ、現実の裏付けがないものになる³。

3. 空転する民主主義の用語

上の言葉は、1979年に書かれた著者の絶筆である。今日、ますますその様相は深刻の度合いを増しており、あたかも預言のように聞こえる。原発事故の後始末において、誰もが信じていない「中長期ロードマップ」を、修正しようとする当事者がいない。日常的に行動抑制を呼びかけながら、国際スポーツ大会を敢行するという。個人としての本音はどう考えているのだろうか。

近隣諸国と対等に付き合う器量をもち得ず、大国の驥尾について、近隣諸国にヘイトスピーチを浴びせ、ミサイルを並べて警戒する。

様々な美辞麗句を述べるが、自国の信条として核廃絶を決断することはしない。「平和、自由、民主主義、正義」という言葉を叫ぶが、他国の人々が納得する信頼を得ることができない。国への信用は、アイデンティティが確立した個人が集まった上でなければ実現しない。

³ 前掲書、pp.15-18